

講義名	教養特講 (地理・歴史へのいざない)			授業形態	
担当教員	藤原 喜美子	開講期・曜日・時限	前期 木曜日 3時限		
		単位数	2	履修開始年次	1年生

主題と概要

現代社会で起こっている様々な現象や人間生活について学び、社会で活躍する際には、地理・歴史分野に関する知識が必要であり、このことは、高等学校までのカリキュラムで地歴教育(地理・日本史・世界史)が行われていることからわかる。しかし、高等教育の学習分野とその量は膨大なもので、受験科目以外は軽視されがちであり、まんべんなく十分な知識を持っていないのが実情である。知識が少ない分野は、その分野に関して新しく学ぼうとする意欲も低くなりがちである。この科目のみで、上述の高等教育の偏頗性を取り除くことは難しいが、幼い時の何にでも関心を持って頂くと立ち戻り、身近な事例や、関心を持ちやすい事例を中心に学ぶことで、地理・歴史分野について関心を持ち、学び続ける態度を養う。

到達目標

学生が、地理・歴史の分野に関する興味を見つけ、自分自身が住む地域と結び付けて説明できるようになる。

提出課題

講義では毎回、授業のテーマに関わる感想文などを記入し、小レポートとして提出してもらい、感想文のテーマは、授業ごとに伝える。小レポートとは別に、講義に関連した指定のテーマについて、レポートの提出を求める。レポート課題の詳細は別途、6月の前半に、講義中の説明ならびにRYUKA portalの掲示を通して指示する。

課題(レポートや小テスト等)に対するフィードバックの方法

自らの講義に書いてもらった感想文の内容は、提出後の講義などで、日本の地理や歴史の事例として紹介する。

評価の基準

評価は、平常点(各回の感想文などを記した小レポート15回分、70点)、レポート(30点)を総合して行う。

履修にあたっての注意・助言他

高校の『地理B』や『日本史B』の教科書は参考になる。もし、高校の時に使用していた教科書があれば読んでほしい。どの出版社のものでもよい。また、書店によっては、高校の教科書を販売している。予習として各自が調べた内容や大事だと思う箇所はメモをとること。講義中に私語をして、他の人の受講生の妨げにならないように注意すること。

教科書

.使用しない。

参考図書

.なし。

その他

<プリント資料>
各回毎、プリント資料を配布する。
プリント資料は無くさないように保存すること。
<参考文献>
講義中に適宜紹介する。

授業計画

授業の進め方や評価方法の詳細は、教室で行う第1回の授業で説明する。

1. 日本の地理や歴史
日本の地理や歴史を知る
2. 大塚の史跡
3. 奈良の史跡
4. 奈良の史跡
5. 京都の史跡
6. 京都の史跡
7. 滋賀の史跡
8. 滋賀の史跡
9. 三書の史跡
10. 三書の史跡
11. 和歌山の史跡
12. 和歌山の史跡
13. 兵庫の史跡
14. 兵庫の史跡
15. 講義のまとめ
あなたが考える近畿地方の魅力

授業形態(アクティブ・ラーニング)

ア:PBL(課題解決型学習)	イ:反転授業(知識習得の要素を授業外に済ませ、知識確認等の要素を教室で行う授業形態)
ウ:ディスカッション、ディベート	エ:グループワーク
オ:プレゼンテーション	カ:実習、フィールドワーク
キ:その他(A-L型であるけども、以上の項目のいずれにも該当しない場合)	

準備学修(予習・復習等)の具体的な内容及びそれに必要な時間

予習
次回の授業範囲の準備学習として、シラバスの授業計画に記してあるテーマを確認し、そのテーマについて興味のある事柄を1つ調べる。また、各回の講義の最後に、翌週の講義のキーワードを紹介するので、翌週までにキーワードなどの言葉の意味を調べておく(約2時間)。
復習
講義終了時、その日の講義内容を確認しながら、内容に関わる感想文を出席カードに記入する。また、各自で、その日の講義の要点(キーワードやポイント)等を確認する(約2時間)。

卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目の関連

この授業は、全学共通科目の教養科目として、上記の主題と概要、到達目標の修得を通じて、本学のディプロマ・ポリシーのうち、特に次のような人材を育成することに貢献できる。
(2)知識を知能に転換することができる。論理的思考力を持った人材
・課題発見・課題解決に必要な情報を見定め、適切な手段を用いて収集・調査・整理することができる(情報収集力)
・収集した個々の情報を多角的に分析し、現状を正確に把握することができる(情報分析力)
・現象や事実のなかに隠れている問題点やその要因を発見し、解決すべき課題を設定することができる(課題発見力)
・さまざまな条件・制約を考慮して、解決策を吟味・選択し、課題の解決に向けた道筋や段取りを明らかにした上で、具体化することができる(構想力)

双方向授業の実施及びICTの活用に関する記述

この講義は、プリントを用いた講義形式で進める。

実務経験の有無及び活用

実務経験あり。授業担当者は日本民俗学(生活文化史)に関わる現地調査や文化財保護業務の実務経験を有しており、その実務経験を活用し、地域の特性を紹介しながら授業を行う。

備考

《受講生へのメッセージ》
講義の進め方の詳細は、教室で行う第1回の講義で説明する。
1年生のみの開講である。大学に入学し、新たな大学生活が始まる中で、1年生の受講生の皆さんには、大学の教室や講義の雰囲気を知っていただければ大変有り難く思う。教室では、教室の換気や手の消毒を励行し、感染症拡大の防止に努める。
万が一、一時的に通学困難になった場合は、授業の配付資料や課題等の連絡は、個別にメールを行い、必ず対応させていただきます。